戦前呉市における洋画団体の変遷と創作動向

― 呉独立美術研究会とその周辺 ―

向井能成

はじめに

戦前の呉市洋画壇における中心的団体は水彩画を主にしているが、その中にあって一九三六年から四三年にかけて油彩画を中心に創作活動を展開した独立展系の画家集団がいた。この集団は呉独立美術研究会の名前で活動し、表現においても写実的表現が主流の呉市においてフォービズム、キュビズム、シュルレアリズムなど当時の独立展で行われていた先進的な表現を実践していた。

戦前の呉市における美術に関する先行研究としては、千田武志氏の『呉市史』第五巻第五章第二節五美術　呉市役所一九八七年、「呉市美術界の特徴と呉美術協会の設立」（呉美術協会五〇年記念誌『美術くれ』一九九六年）、倉橋清方氏の「呉線沿線の美術―戦前の呉地域を中心に―」（図録『呉線沿線の美術』呉市立美術館二〇〇七年）、「呉美術協会の発足と大正～昭和戦前期の呉美術」（呉美術協会創立六〇年記念誌『美術くれ』二〇〇六年）など総論的記述が多い。本稿では呉独立美術研究会の活動状況を、一九二〇年代から四五年までの呉市における洋画団体の変遷の流れの中で、新聞・雑誌資料と聞き取り調査によって跡づける。

以下、本稿では、1で呉市洋画壇の誕生と変遷について、2で宇根元警と呉独立美術研究会結成の関係について、3で呉独立美術研究会が主催した展覧会や独立美術協会展への出品状況を基に、同会の盛衰について、4で呉独立美術研究会会員個々の創作動向について、5で戦前に来広した独立美術協会会員清水登之と田中佐一郎の活動と広島・呉の画家への影響について述べたうえ、6で呉市の文化的特性と独立美術研究会との関係についての考察を示す。

1. 呉市における洋画壇の誕生と変遷

呉市における洋画壇の誕生については一九二〇年代とする資料がある。[1] この頃に活動を開始した長田健雄、朝井清、宇根元警の三人はその後の活躍からまさに呉市洋画壇のパイオニアといえる。この三人を中心に組織的・継続的活動を行った最初の大きな洋画団体としてポベニエ会が誕生する。同会は文化活動に理解の深い青木実医師の仲立ちによって、海軍士官と呉市内小学校教員を主なメンバーとして二八年八月頃に発足、翌年一月に第一回展を開催している。同会は、洋画を志す者やその愛好家たちが集まって緩やかに組織された団体であった。また同会は単なる創作団体ではなく、市民に会員の作品を貸出し、市民への宣伝と絵画趣味を養成するといった啓蒙活動など幅広い活動を行っている。[2]

おおらかな団体であるがゆえに、やがて会員はそれぞれが目指す方向に枝分かれしていく。一九三一年に学校教員を中心とした水彩画グループ呉蒼原会、翌年に長田健雄ら市内学校の教員を中心とした水彩画グループでその後の戦前呉市洋画壇で中心的存在となる互歩会、そして三六年に独立展系の油彩画のグループ呉独立美術研究会が誕生する。

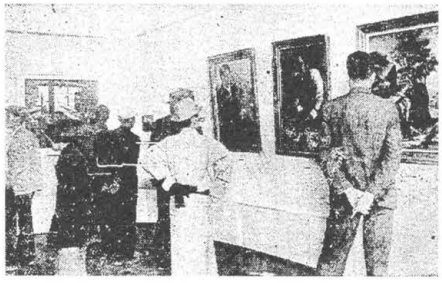

図1　第2回海港美術展覧会会場風景
1932年（於中国新聞社呉市呉支局中国会館）

ポベニエ会が誕生したのと同じ頃の一九二九年に、益川知明を中心にインデペンデント会（三一年から海港洋画協会と改名）が結成されている。同会の展覧会には、当時広島市にあって前衛的であった山路商、檜山武夫、靉光、福井芳郎や後に日本画に転向する賀茂郡広村（現呉市広）出身の船田信夫（玉樹）が出品している。ポベニエ会とは異なる勢力として、注目すべき団体である。[3][4]

2. 宇根元警と呉独立美術研究会の結成

一九三六年の夏頃、ポベニエ会の独立展系の画家を中心に呉独立美術研究会（以下呉独立と表記）が結成され、荒井不可志・鎌田功治・鎌田知治・空野洲絵人（八百蔵）・三王重志・吉田務によって翌年五月二八日から三〇日に第一回新作発表展が呉銀行で開催された。[5]

呉独立は独立美術協会展（以下独立展と表記）出品者あるいは同展への出品を目指す人達が集まり会員相互に作品を持ち寄り互いに批評する研究会として始まっており、中央画壇の美術動向に敏感であり独立展への強い指向性を持っているが、これらはポベニエ会での彼らの先輩格ですでに上京し独立展に出品を続け創作活動を行っ

ていた宇根元警の影響が大きかったと思われる。

宇根元　警（うねもと　けい）一九〇四年八月二日～一九七〇年九月二五日

一九〇四年安芸郡吉浦村（現呉市吉浦）に生まれる。二四年に広島県広島師範学校を卒業し教員となる。広島市を中心とした教員の美術展であるイーゼル会主催よる教員美術展、広島県美術協会展などに出品している。その後、三〇年には第五回一九三〇年協会展、翌年の独立展第一回展に出品するなど早くから中央展へ出品している。三二年に宇根元は上京し教職のかたわら当時独立美術協会員の清水登之に師事、四〇年には第一〇回独立展出品作《葡萄》（図2）で独立賞を受けている。

図2　宇根元警《葡萄》1940年
第10回独立展
呉市立美術館所蔵

3．呉独立美術研究会の盛衰

一九三七年五月二八日から三〇日に開催された呉独立美術研究会第一回新作発表展について『呉新聞』一九三七年五月二五日第二面につぎの様に掲載されている。[6]

「昨年の夏、在呉の独立美術展出品者によって結成された呉独立美術研究会では発会以来毎月会員相互の真摯なる研究精進によって各自の美意識を培っていたが、本年三月本邦洋画壇の前衛として権威ある独立美術協会展に四名の入選者をだし、呉洋画壇のため万丈の気を吐き、今や押しも押されもせぬ確固たる地位を占めるにいたったので、二十八日から三十日まで、中国新聞社呉支局後援のもとに本通六丁目呉銀行楼上で、第一回新作発表展を蓋明けすることになった、会員は左記六氏で作品は独立展入選の傑作をはじめ、いずれも五十号以上の大物揃ひ、各人五点乃至十点の多きに達している」（図3）

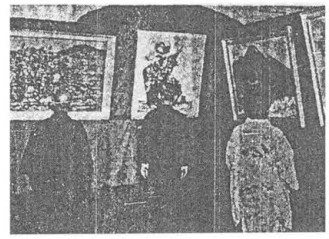

図3　呉独立美術研究会
第1回新作発表展会場風景
1937年　（於呉銀行）

呉独立の活動は一九四三年五月に呉新聞社で開催された第八回新作品展まで続いており、六年間に九回の展覧会が呉独立主催によって表1のとおり開催されている。

一九四〇年から翌年にかけて呉独立は全盛期を迎えている。四〇年三月二・三日に中国新聞社呉支局において紀元二千六百年奉祝独立美術展覧会が開催されている。これは前年の第九回独立美術協会秋季展に出品された同協会員である林武、高畠達四郎、田中佐一郎

表1　呉独立美術研究会が主催した展覧会

	開催年		会期	展覧会名	会場	後援	出品者	出品数	出典資料
1	1937	昭和12	5.28-30	呉独立美術研究会 第1回新作発表展	呉銀行	中国新聞社呉支局	荒井不可志，鎌田功治，鎌田知治，空野洲絵人，三王重志，吉田務（以上6名）	50数点	呉新聞 S.12.5.25/29
2	1937	昭和12	9.11-19	呉独立美術研究会 第2回小品展覧会	福屋百貨店(呉市)	呉新聞本社，中国新聞社呉支局	荒井不可志，鎌田功治，鎌田知治，空野洲絵人，三王重志（以上5名）	約35点	呉新聞 S.12.9.10
3	1938	昭和13	7.1- 3	呉独立美術研究会 第3回新作発表展覧会	呉銀行	中国新聞社呉支局	荒井不可志，鎌田功治（出征中），三王重志，鎌田知治，空野洲絵人，吉田宗一（以上6名）	50余点	呉新聞 S.13.6.24
4	1938	昭和13	11.13-15	呉独立美術研究会 第4回洋画新作小品展覧会	福屋百貨店(呉市)	中国新聞社呉支局	荒井不可志，鎌田功治（出征中），三王重志，鎌田知治，空野洲絵人，吉田宗一（以上推定6名）	不明	呉新聞 S.13.11.15
5	1939	昭和14	5.26-28	呉独立美術研究会 第5回洋画新作品展覧会	呉銀行	中国新聞社呉支局	吉田宗一，荒井不可志，空野洲絵人，三王重志，鎌田知治，木村成美，吉田務（以上7名）	45点	呉新聞 S.14.5.24/27
6	1940	昭和15	3.2- 3	紀元二千六百年奉祝“独立美術展覧会”	中国新聞社呉支局	中国新聞社呉支局	林武，高畠達四郎ら1939年開催の独立美術協会“秋季展”の会員作品20点に加えて、鎌田功治，吉田宗一、空野洲絵人，鎌田知治，吉田務，荒井不可志，木村成美，三王重志，水本清（以上9名）ら呉独立美術研究会員作品21点	41点	呉新聞 S.15.3.1/ 2
7	1940	昭和15	11.10-11	呉独立美術研究会 第6回洋画新作品展	中国新聞社呉支社	中国新聞社呉支社	鎌田知治，吉田務，荒井不可志，木村成美（以上4名）	30余点	呉新聞 S.15.11.1
8	1942	昭和17	4.27-29	第7回（呉）独立美術研究会 洋画展覧会	呉新聞社	呉新聞社，中国新聞社呉支社	鎌田知治，吉田務，藤田幸子，荒井不可志，木村成美（以上5名）	30余点	呉新聞 S.17.4.27/28
9	1943	昭和18	5.15-17	呉独立美術研究会 第8回新作品展	呉新聞社	呉新聞社，中国新聞社呉支社	鎌田知治，吉田務，木村成美，荒井不可志（以上4名）	40点	中国新聞 S.18.5.14 呉新聞 S.18.5.16

＊呉新聞（大正14年創刊）は中国新聞の姉妹紙で、記事は『中国新聞』呉版と重複することが多く、また中国新聞呉支社（局）と呉新聞本社は同一の建物内にあった。

など一二作家の作品二〇点を借り受け、呉独立会員九名の作品二一点を加えた展覧会である。独立美術協会を代表する作家の新作と呉独立会員による展覧会は、呉独立が主催した展覧会の中でも最も華やかなものであった。[7][8]

同年に吉田宗一、空野洲絵人、三王重志、水本清、鎌田功治の五名が一身上の都合で呉市を離れるという事態に陥ったが、空野洲絵人と鎌田功治は同会に籍を残し、新たに木村成美、吉田務が加入し、四一年の第一一、翌年の第一二回独立展では出品した、荒井不可志、鎌田功治、鎌田知治、空野洲絵人、木村成美、吉田務の六名全員が入選を果たすという快挙をなしとげている。

この時、鎌田知治は当時の新聞に「全国的に見て呉ほど独立展常連の多い地方はありません」と語っている。[9] 表2は呉独立会員も含めて、一九三一年の第一回から四四年の第一四回展まで独立展に入選した呉市出身画家と出品作品名をまとめたものである。第一一・一二回展における広島県出身画家は二一名、そのうち呉独立会員であった画家は七名、呉市出身画家まで含めると一〇名と高い割合を占めている。[10]

急速に力をつけ充実した活動を展開していた呉独立も他の呉市の美術団体同様、時代の波に飲み込まれていくことになる。一九四二年に呉海軍を後ろ盾にした「呉海洋美術協会」が設立される。二年前の三月には一部市民に対して切符制による米・砂糖の配給制が実施されている。[11] 画材の入手も困難を極め、軍港都市であった呉市においては、海軍の援助無しには絵を描くことができない状況にあった。呉独立の鎌田知治は創作環境の悪化についてつぎのように語っている

「それに時局柄材料のよいものが手に入らず□□的にも物質的にも随分打ちのめされました、しかし不思議に内から力が燃え上がってきて、仕事は着々とはかどりました、昨夜入選電報を手にして紀元二千六百年を一層輝かしく記念することができるやうです」[12]

呉海洋美術協会の会員には呉独立の他に、呉市洋画壇において中心的な団体であった互歩会、呉蒼原会のメンバーなど呉市の主な美術団体は同協会に集約された。一九四三年五月には、呉海洋美術協会をはじめ呉市内の一七〇の全ての文化団体は呉市翼賛会文化部に統合された。[13] 四三年五月一五日から一七日に呉新聞社（中国新聞社呉支社）で開催された呉独立美術研究会第八回新作品展を最後に呉独立としての活動は見られなくなった。

4．呉独立美術研究会の画家たち

本章では呉独立会員個々の戦前における活動状況を概観する。

・鎌田知治〔知路〕（かまだ ともじ）一九〇七年

表２　呉独立美術研究会会員及び呉市出身画家の独立展出品状況（戦前）

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1931	昭和6	第1回	宇根元警 《花を配した静物（A）》									
1932	昭和7	第2回	荒井街〔不可志〕 《或る製氷会社》	宇根元警 《Ｊの像》								
1933	昭和8	第3回	宇根元警 《静物》	常安静人 《静物》	三好光志 《洋燈其他》《庭》	吉田宗一 《静物》						
1934	昭和9	第4回	荒井街〔不可志〕 《海濱ノ山》	宇根元警 《ガード風景》	鎌田功治 《電車と車庫附近》							
1935	昭和10	第5回	荒井街〔不可志〕 《山》	宇根元警 《紙鳶持つ子供》	鎌田功治 《静物》	鎌田知治 《晩秋》	常安静人 《果物など》	吉田宗一 《要塞砲》				
1936	昭和11	第6回	宇根元警 《かに》	鎌田功治 《新緑と白壁》	鎌田知治 《サボテンのある風景》	常安静人 《風景温室村》	吉田宗一 《海岸風景》					
1937	昭和12	第7回	荒井不可志 《海濱》	宇根元警 《えび》	鎌田功治 《とうもろこし花くだ物》	鎌田知治 《岩濱》	空野洲絵人 《かぼちゃ畠といが茄子》	吉田宗一 《室内静物》				
1938	昭和13	第8回	荒井不可志 《母子》	宇根元警 《海》	岡部繁夫 《風景》	鎌田知治 《山》	空野洲絵人 《室戸印象》	常安静人 《涼夜》	吉田宗一 《向島展望》			
1939	昭和14	第9回	荒井不可志 《風景（B）》	宇根元警 《漁り》《森の中》	岡部繁夫 《風景 A》	鎌田知治 《村童》	空野洲絵人 《貝ト木》	常安静人 《鳩》	吉田宗一 《海邊》			
1940	昭和15	第10回	荒井不可志 《海邊》	宇根元警 《水窓》《葡萄》	岡部繁夫 《月と人物》	鎌田功治 《徐州風景》	鎌田知路〔知治〕 《蓮沼》	空野洲絵人 《長者森（秋芳臺）》	常安静人 《水邊》《搖籃》	吉田宗一 《丘》		
1941	昭和16	第11回	荒井不可志 《風景》	宇根元警 《樹林》《濱邊》	岡部繁夫 《花のある庭》	鎌田功治 《土》	鎌田知路〔知治〕 《収穫》	木村成美 《樹木》	空野洲絵人 《奇岩とコロンケット》	常安静人 《入江》	吉田宗一 《寫眞室》 《尾道風景》	吉田務 《風景》
1942	昭和17	第12回	荒井不可志 《子供達》	宇根元警 《早春》《秋果》	岡部繁夫 《風景（二）》	鎌田功治 《嶗山残雪》	鎌田知路〔知治〕 《呉晋》	木村成美 《池畔》	空野洲絵人 《芋掘り（1）》	常安静人 【会友】 《収穫（一）》 《収穫（二）》	吉田宗一 《山麓》	吉田務 《風景 A》
1943	昭和18	第13回	荒井不可志 《海邊》	宇根元警 【会友】 《農人》	岡部繁夫 《風景》	空野洲絵人 《十六羅漢》	常安静人 【会友】 《樹々は實る》	吉田宗一 《残雪》	吉田務 《朝焼》			
1944	昭和19	第14回	宇根元警 【会友】 《耕地》《麦刈》	空野洲絵人 《戦う漁村》	常安静人 【会友】 《出漁》《漁婦》	吉田宗一 《採果》	吉田務 《松原》					

＊網掛けは呉独立美術研究会員であった作家

『昭和期美術展出品目録／戦前編』東京文化財研究所美術部編により作成

～一九八〇年　戦前期には「知治」「知路」の名前を併用している。一九〇七年、呉市に生まれる。二五年、広陵中学卒業。呉市鍋小学校の代用教員となる。三〇年、第五回一九三〇年協会展に知路の名前で《ヒマワリとカニ》《ぎざみ》を出品し入選。同年、ポベニエ会第三回展に《水仙と鳩》《鍋の中の小魚》を出品。三三年、正教員認定に合格し正教員となる。三六年、第五回独立展に《晩秋》(図4)を出品入選、以後四二年の第一二回展まで同展に連続入選。

ポベニエ会第三回展に出品された鎌田知治の作品評が『芸備日日新聞』一九三〇年一〇月二一日第二面に掲載されている。

「非常に勇敢な人らしい。恐ろしくキツイ絵だ。『水仙と鳩』『鍋の中の小魚』は比較的静かな態度で観照された絵のようだが何となくこの人の領域でないのではないかと考えます。やはり『さざえとかにの腹』『原書の一ページ』乃至『蛙とかたつむりなどの居る庭』『女教員とかに』などが本領の様に考えられます。私は『蛙とかたつむりなどの居る庭』が最もすきです。野趣の横溢した奔放で自由な世界を称えます。こんなのを見ると貧乏くさい絵などは犬に食われてしまえという気がします。」

この評者は呉市出身の官展系画家の水船三洋（同じく呉市出身の彫刻・版画家水船六州の実兄）で、前年に東京美術学校を卒業している。アカデミックな表現スタイルを習得したばかりの水船三洋にとっては「キツイ絵」という印象をもちながらも「野趣の横溢した奔放で自由な世界を称えます。」と水船三洋自身にはない魅力を評価している。

図4　鎌田知治《晩秋》1935年
第5回独立展

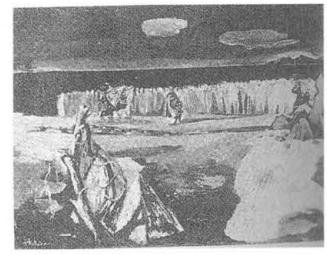

図5　鎌田知治《村童》1939年
第9回独立展

図4は三五年の第五回独立展に出品した作品であるが空間の変形による画面全体にうねりの様な動きがありフォービズムの影響が見てとれる。図5の三九年の第九回独立展に出品した作品《村童》では、画面のうねるような動きは消えて静かささえ感じる。近景には作者の幼い頃の記憶の一場面の様なユートピアが描かれているのに対して、遠景の水平線や空と雲の表現は時代の閉塞感を表すかのような不安な世界を感じさせる。東京国立近代美術館主任研究員の大谷省吾氏は、「地平線の夢　序論」において、昭和一〇年代の幻想絵画に広く地平線や水平線を境にしてユートピアと不安な世界が数多く描かれており、それらはシュルレアリズムの影響だけではなく社会の閉塞感を背景とした広い意味での新浪漫主義の表れであるとしているが[11]、《村童》においても水平線を境にユートピアと不安な

世界が対比されている。四〇年の図6では蓮沼で働く人を描いているが、以前より写実的な表現に変化している。

鎌田知治はポベニエ会員から呉独立に設立に参加し呉独立主催の九回全ての展覧会に出品、呉市に在住し創作活動を継続しており同会の最も中心になっていた人物である。呉独立会員であった鎌田功治は実兄。

図6　鎌田知治《蓮沼》1940年
第10回独立展

・鎌田功治（かまだ こうじ）　一九〇二年六月一〇日～一九七五年一一月二八日

一九〇二年、呉市二河通に生まれる。三〇年、國學院大學高等師範部卒。呉市岩方尋常小学校に赴任。三四年第四回独立展に出品の《電車と車庫付近》で初入選。以後、独立展には、第五回から七回展、第一〇回から一二回まで入選。

呉独立主催の展覧会には第一回展から第四回展までと紀元二千六百年奉祝独立美術展の五回に出品をしている。

三七年に応召し北支に赴く。三九年に帰還。翌年、教職をいったん退き中華民国青島に住む。四五年、呉空襲によりそれまでに制作した作品のほとんどが消失している。呉独立会員であった鎌田知治は実弟。図7は三六年の作品であるが、前景の道の描写などにヴラマンク風の強いタッチがみられフォービズムの影響が見てとれる。

図7　鎌田功治《新緑白壁》
1936年 第6回独立展

・荒井不可志（あらい ふかし）〔荒井街〕

一九一一～一九八七年　一九三二年から三五年頃まで「街」を名乗る。

一九一一年、広島市に生まれる。二九年、広島市立商業学校卒業。荒井の最初期の出品歴としては、二九年の第一四回広島県美術協会展（以下県美展と表記）にあたる昭和美展に出品した《静物》があげられる。三二年、第二回独立展に出品した《或る製氷会社》で初入選。三二年一一月、広島洋画協会結成に参加。同会の会員は中央の団体展に入選した者に限られており、広島洋画界の中でまさに実力者の集まりであった[15]。図8

は同協会の忘年会での写真であるが、後列右から三人目に荒井が写っている。

三三年五月に開催された第一八回県美展に《風景》他一点を推薦出品。同年一〇月、広島洋画協会第二回展覧会に《風景》を出品。同年一二月、広島新油絵展で独立展系の亀崎頼一、辻潔、秦研次郎らと共に出品。三四年、第四回独立展に《海浜の山》を出品。翌年、第五回独立展に《山》を出品。三五年、第二一回県美展に無鑑査出品。三七年、第七回独立展に《海浜》を出品している。

以上のような堂々たる画歴をもって呉独立に参加しているが、荒井は三七年まで呉市での美術展では出品が見られないため、三六年頃、務めていた芸備銀行（現広島銀行）の転勤により呉市に移住したと思われる。呉独立が主催した九回全ての展覧会に出品を続けており、荒井も同会の中心的存在であった。図9は四一年の第一一回独立展に出品された作品《風景》である。呉独立時代の荒井の作品には海辺の風景を題材にした作品が多く見られる。

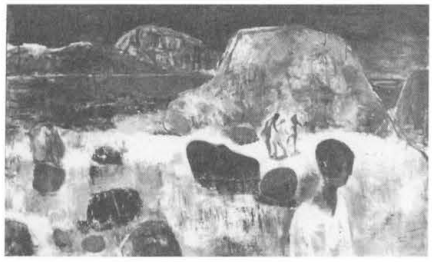

図9　荒井不可志《風景》1941年　第11回独立展

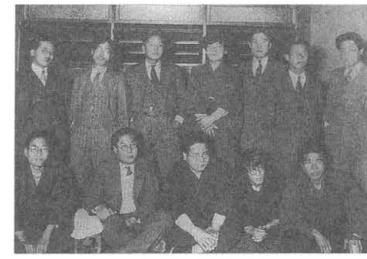

図8　広島洋画協会忘年会

・空野洲絵人（そらの すえと）〔八百蔵（やおぞう）〕

一九一六年八月二四日～一九九三年五月一七日

本名は末人（すえと）。戦前は「洲絵人」。戦後一九六二年までは「末人」。六三年頃から「八百蔵」を名乗った。

一九一六年、安芸郡警固屋町（現呉市警固屋）に生まれる。三四年、上阪し大阪独立美術学校に学ぶ、三七年、第七回独立展に《かぼちゃ畠とイガ茄子》（図10）を出品し初入選。同年、呉独立第一回新作発表展に出品。その後、上京し以後四〇年間東京に住む。四三年五月一日から三日まで呉新聞社において、呉市で初めての個展を開く。石原産業客員としてシンガポールを本拠地として南方諸地域を旅して、二年間取材。終戦を迎える。戦後、独立賞を受け独立展審査員を務めるなど、呉独立メンバー中で最も名前を知られている画家であるが、小学校三

図10　空野洲絵人（八百蔵）《かぼちゃ畠とイガ茄子》1937年　第7回独立展

年より鎌田知治にデッサンを教わっており、呉独立には、三七年の第一回展から四〇年の紀元二千六百年奉祝独立美術展覧会まで六回出品している。上京後も呉独立へ出品を続け、出品していない時にも呉独立との関係を保っており、空野も同会の中心メンバーの一人であった。[16] 図11は三八年、第八回独立展に出品された作品《室戸印象》である。波の形は意匠化され、樹木や花が波間から生え出てくるという非現実的空間が作り出されている。当時の独立展で流行していたシュルレアリズムの影響がうかがえるとも言えるが、空野の頭の中にある室戸岬の印象をキュビズムの影響を受け意匠化した作品と見ることもできるのではないか。

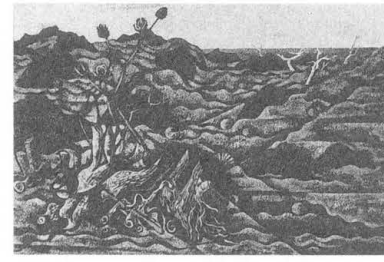

図11　空野洲絵人（八百蔵）《室戸印象》
1938年　第8回独立展

・三王重志（さんのう しげし）生没年・出生地不明

呉独立には、第一回展から紀元二千六百年奉祝独立美術展覧会まで六回の展覧会に出品。独立展の入選歴はない。呉海軍建築部に勤務していたこと、一九四〇年に絵の勉強のために上京したということしかわかっていない。[17] 独立展への入選歴がないため作品の手がかりは無いが、僅かに『呉新聞』一九三九年六月二五日第一面に三王のスケッチ《初夏の海》（図12）が掲載されている。

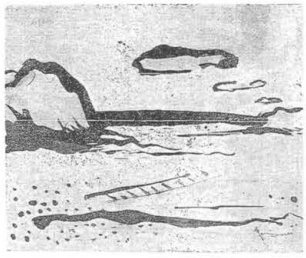

図12　三王重志《初夏の海》

・吉田宗一（よしだ そういち〔むねいち〕）生没年・出生地不明

呉独立には一九三八年七月の第三回新作発表会展から四〇年の紀元二千六百年奉祝独立美術展覧会まで四回出品している。独立展には第三回、第五回から一四回まで連続入選している。

吉田宗一（以下宗一と表記）についても不明の点が多い。宗一は呉市で生まれ育った画家ではないと思われる。その根拠として宗一は呉独立が発足した三六年夏以前の三年前の第三回独立展にすでに入選しており、三六年以前から呉市に住んでいたのであれば、呉独立の第一回展から出品していたはずである。さらに三五年の第五回独立展出品時の住所は「岡山市大供」、翌年第六回独立展出品時の住所は「岡山県浅口郡船穂村」になっており岡山県出身であろうか。宗一の呉市での勤務先であった福屋（百貨店）呉店は三五年四月一日に開店していることから、[18] 三七年終わり頃か翌年に同店で勤務するため呉市に移り住み呉独立に入会したのではないかと考えられる。

四〇年五月に広島で開催された第三回フォルム美術協会展（図13）の記念写真の最後列左端に宗一が写っている。フォルム美術協会は三八年に山路商等により広島市で結成され、同会は山路の「周辺作家、及び弟子に近い人間を集めたグループ[19]」であり、宗一は山路と親しい関係にあったと思われる。

図13　第3回フォルム美術協会展 1940年

図14　吉田宗一《尾道風景》1941年 第11回独立展

この写真に写っていることから宗一は四〇年頃転勤等により呉市から広島市に移住したと思われる。戦災によって亡くなったのであろうか、戦後に宗一の活動を示す資料は見つかっていない。

・吉田務（よしだ つとむ）一九一三年二月二六日～一九四五年六月一四日

一九一三年、賀茂郡仁方西神町（現呉市仁方西神町）に生まれる。仁方高等尋常小学校卒業、広島県福山師範学校（三二年四月に広島県師範学校に統合）入学、同校を卒業。広尋常小学校、仁方尋常小学校に教諭として勤務するが、務の娘が仁方尋常小学校に入学したため、同じ学校に娘といるのは良くないとの考えから、教諭を辞めて広にあった海軍第一一空廠会計課に勤務する。その後、同廠で収賄事件が起こり、会計課員全員が憲兵隊によって厳しい取り調べを受けたのを契機に体調を崩し、四五年六月に三二歳で死去している。

呉独立には三七年の第一回展と三九年の第五回展から四三年第八回展までの六回出品している。

独立展へは第一一回展から第一四回展まで四回連続して入選している。『呉新聞』一九三九年五月二七日第二面の呉独立第五回展の紹介記事のなかで吉田務について「アブストラクト派の奇才」として紹介されているが、遺族からの聞き取りによると、図15にみられるような風景画が多かったようだ[20]。

図15　吉田務《無題》制作年不詳 個人蔵

・木村成美（きむら しげみ）生没年・出生地不明

呉独立には、一九三六年の第五回展から四三年の第八回展まで五回出品している。独立展へは四一年の第一一回展と翌年第一二回展に入選歴がある。『呉新聞』一九四一年三月五日に木村についてつぎのように記載されている。

「なかでも今回初入選の木村成美氏は、医学博士といふ立派な肩書きの内科のお医者さんで畠違いではあるが、洋画もシュール・リアリズムの研究などには特に熱心で造詣が深く、またかつてマンドリン倶楽部なども主宰していたといふ音楽家で、全く芸能的才能に恵まれており、呉独立美術研究会での理論的指導者である」

戦後、木村も活動を示す資料は見つかっていない。木村の作品図版が僅かに『呉新聞』一九四二年四月二七日第二面の呉独立第七回展の記事に第一一回独立展に出品した作品《樹木》の図版が掲載されている。

図16　木村成美《樹木》1941年
第11回独立展

その他の呉独立会員として水本清、藤本幸子の二人ともに経歴は全く分からない。また独立展への入選歴が無く作品図版も確認できなかった。

広島県の視野から独立展系地方組織として呉独立を位置付けてみると、呉独立を除く広島県における独立展系画家によるグループ展は、一九四〇年二月、独立美術協会広島支部による独立美術展までみられない。その後、四二年一一月広島独立作家協会秋季展などがみられるが、継続的な組織としては六二年の広島独立クラブの創立まで待たなくてはいけない。

全国的にみても呉独立（一九三六年）より早い創立の地方組織は、三岸好太郎らによる北海道独立美術作家協会（三三年）、横浜新興美術協会（三一年）、須田國太郎らによる独立美術京都研究所（三一年）、独立美術大阪研究所（三一年）、児島善三郎の出身地福岡の福岡独立作家協会（三三年）、海老原喜之助の出身地鹿児島の独立鹿児島美術作家協会（三三年）であり、大都市の集まる首都・近畿圏以外では、独立美術協会創立会員や有力会員の出身地である北海道、福岡、鹿児島だけである。[21]

呉独立の活動期である一九三六年から四三年の独立展は、設立当初の前衛性はやや薄れていたとはいえ先進的な表現が行われており、新聞紙面に掲載された呉独立関連の記事には「異彩を放つ」といった見出しがつけられ、中央画壇における先進的な絵画表現を呉地域に紹介した意義は大きい。

しかしながら、戦前の独立展における大きなムーブメントの一つ

であったシュルレアリズム的傾向が、呉独立メンバーの作品に若干はみられるものの大きく発展しなかったのは軍港都市であるがゆえの限界であったといえるかもしれない。

5．戦前に来広した独立美術協会の画家とその影響

独立美術協会において大家的な存在であった清水登之は、一九三三年一〇月に広島市において清水登之・鈴木亞夫洋画展覧会、同年一一月に清水登之広島風景並に肖像画展を開催している。三四年五月には、第四回独立展の移動展が初めて広島で開催されている。同時に、清水登之・小島善太郎・兒島善三郎・三岸好太郎・中山巌らの講演会も開かれている。この時清水登之は、独立美術協会設立趣旨である独立宣言や同会の目標、同会における創作動向などについて連載記事を芸備日日新聞に寄稿している。これら清水登之の活動はその当時の広島や呉の画家達に大きな影響を与えていたと思われる。[22]

前述のとおり宇根元警は一九三二年に上京し清水登之に師事している。どの様な経緯で宇根元が清水登之に師事したのかはわからないが、宇根元が呉市在住時に属していたポベニエ会の創設者の一人である青木実が三四年に亡くなった時に、同会展において青木が収集していた絵画コレクションも展示されている。この時に展示されたのは南薫造四点、清水登之四点、中村不折二点の計一〇点であった。南は青木とは広島一中時代に一級上の同窓生の間柄であり南の四点は当然であるが、清水も南と同数収集されたという事実は、当時、清水が広島・呉の美術界と関わりをもっており、青木も清水を評価していたためと思われる。よってポベニエ会に属していた宇根元や呉独立会員達も強い影響を受けていたと考えられる。[23]

つぎに広島を来訪し呉・広島の美術界に影響を与えた独立美術協会の画家としては田中佐一郎がいる。三一年四月に、広島市で靉光、井上長三郎、加藤一也、休場実、横山重夫、峰村リツ子、田中佐一郎、檜山美雄と美術家協会展を開催している。三九年一一月に佐一郎は、広島市の出版社である実現社の主催で京都の陶芸家宇野三吾と二人展を開催している。この時、同社で田中佐一郎を迎えて座談会が開かれ、広島市だけでなく呉市からの同好者も参会している。[24] 原資料を特定できないが、呉市史編さん資料の中に、四〇年始め頃と推定される長田健雄による前年の呉画壇を回顧した新聞記事「呉画壇を語る」の切り抜きの中に「独立美術の田中佐一郎画伯がヒョッコリと来呉された。この芸術家は清談幾夜、間もなく帰京されたが、甚だよい印象をあたへられたやうに思ふ」と記されている。[25] 田中佐一郎は前述の展覧会及び座談会開催の時に呉を訪問したものと思われる。田中佐一郎の戦前の制作と思われる小品（図17）が呉市内の個人宅に所蔵されている。裏面に「音戸瀬戸　田中佐一郎」のサイン

が記されているが制作年のサインは無い。所蔵者の母は田中佐一郎と同じ京都出身で、その兄が京都で新聞記者をしていた関係で、佐一郎の絵を預かって売っていたこともあり同家に残されている。呉市内のある名士の求めにより佐一郎に帯の絵を依頼する仲介をしたこともあったそうで、呉市と佐一郎の繋がりはあったようである。何年かはっきりしないが、所蔵者がまだ幼い頃に佐一郎が同家を訪れたこともあったそうである。この作品は呉市と佐一郎の関係を物語る証拠である。

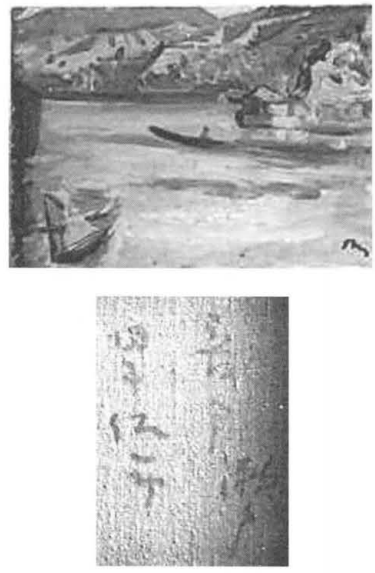

図17　田中佐一郎《音戸瀬戸》制作年不詳
個人蔵　下段は同上裏面サイン

呉独立主催の紀元二千六百年奉祝独立美術展における出品作家のうち、佐一郎は《支那山岳風》《露営火》《軍馬装蹄》など三八年に従軍画家として中国大陸で取材したと思われる新作が九点と他の画家より多く出品されている。四〇年発刊の『独立美術十周年記念画集』に《露営火》の図版（図18）が掲載されている。呉市での出品目録にも同名の作品があり、同一作品であったかもしれない。また、空野の経歴に、独立展に初入選した三七年の項に田中佐一郎に師事とある。この頃にもあるいは佐一郎は来呉していたのかもしれない。田中佐一郎もまた当時の広島・呉の画家たちに影響を与えていたと思われる。

図18　田中佐一郎《露営火》

6. 呉市の文化的特性と呉独立美術研究会

戦前の呉市洋画壇の隆盛の要因には、第一に一九三六年の満州事変以降の軍事費の膨張にともなう「呉廠景気[26]」といわれる、呉海軍工廠など軍需産業を中心とした好景気、第二には第一章及び第五章で述べた青木実のような呉市で活動する画家達を支えた文化人の存在がある。しかし戦時期における呉での展覧会は四四年一一月まで開催されており、前述の要因だけでは終戦前年の終わり頃まで画家達や美術団体が活動していたという事実までは説明出来ないように思われる[27]。

『呉市の展望』（芸備観光地誌社一九五二年）の中で、発刊当時、

呉新劇協会会長及び呉市文化団体連合会長であった高坂利雄氏が「呉文化を描く」と題して軍港都市であるがゆえの戦前における呉市の文化的特性について、当時の呉市で生活していた者としての実感が述べられており前述の疑問に対する答えの一つがある。

「呉市が軍港の開設によって発展した土地であるので、終戦の年まで総べてに亘って海軍と共に在ったと云う事は否定できない。市民の文化活動―ここでは芸術面に極限するが―も、この範囲から脱け出ることはできなかった、というよりも却ってその為に奔放なノビノビした発展ができなかったと云うことができよう。一枚の絵を描き、一枚の写真をとるにも要塞地帯(ママ)取締法令は身の縮む思いをさせたし、検閲の矢鱈な厳しさは演劇一本の上演にも、何を選ぶかと云う最初の段階でいじけた態度をとらざるを得なかった。…〈中略〉…　然し乍ら、その永い間（明治二一(ママ)年呉鎮守府開設以来昭和二〇年までの六〇年間）雑然と他の土地から集まり住んで来て定着した大半の市民層の中には、意識するとしないとに拘わらず、雑草的な一種の逞しさを内に抱き乍ら、兎に角芸術運動を続けてきた人々があった事は事実であり、特に軍の厭政下にあって最も困難視された前記の絵画、演劇が、最も秀れた運動を展開したことは、踏まれるが故に強い雑草的な逞しさの現れであったと見てよいと思う。〈後略〉」[28]

私は、この考えをもう一歩進めて、前掲資料中にある呉市の文化的特性として「意識するとしないとに拘わらず、雑草的な一種の逞しさを内に抱」いていたことと、新しい日本絵画の創出のために無名の画家達のエネルギーを取り込もうとした独立美術協会の在野精神とが適合したことによって、写生の制限など画家にとって不利な状況下にあった呉市に独立展系団体が芽生えたのではないかと考える。

おわりに

呉独立は、一九三六年夏頃結成され、三七年から四三年の六年間に九回の展覧会を主催した。第一一・一二回独立展では、広島県出身出品者二一人中七人が呉独立会員であった。呉市出身者まで範囲を広げれば一〇人と高い割合であり、呉独立会員全員が入選するなど高い水準にあった。広島県において呉独立のような独立展系画家による継続的な活動はこの時期にはまだ他に見られない、全国的にも早い時期の結成であった。

以上、呉独立の活動状況について、本稿の調査によって或る程度明らかにすることができた。

戦前の呉市に独立展系の画家集団がいたことは、いまではあまり知られていない。創作活動が困難な軍港都市呉市にあって、活発な活動を展開していた呉独立美術研究会について、呉市の美術史において後世に残すべき事項として資料等により跡づけた。

注

(1) 『呉日日新聞』一九二七年二月一九日第五面
(2) 『呉新聞』一九三一年一月二三日第二面
(3) 一九三〇年六月に開かれた第二回洋画インデペンデント展には、▲山路商《花》《少年の顔》《街景》▲霞光《花》▲檜山武夫《花》《プラットホーム》(現広島県立美術館所蔵)《構内》《風景》▲福井芳郎《風景》《クロッキーA》《同B》など広島市の画家の作品が出品されている。(『呉新聞』一九三〇年六月一三日第一面)
(4) 一九三二年一〇月に開催された第二回海港美術展覧会(図1)には、▲山路商《T型定規のある静物》《大連風景》、▲檜山武夫《機関庫》、が出品されている。(『呉新聞』一九三二年一〇月九日第三面) なお、現在これらは広島県立美術館の所蔵となっている。
(5) 『呉新聞』一九三七年五月二五日第二面
(6) 呉新聞は一九二五年に中国新聞を母体として発刊を開始。呉新聞社は中国新聞社呉支局と同社屋内におかれ、呉市及び付近町村の記事に力を入れていた。社屋は四五年に呉空襲で焼失したため休刊。四八年に中国新聞社に吸収合併された。(『中国新聞八十年史』中国新聞社史編纂委員会一九七二年 九八頁、一五二〜一五三頁)
(7) 『呉新聞』一九四〇年三月一日第二面・二日第二面
(8) 『呉新聞』一九四〇年一一月一日第二面、「独立美術協会小史」(独立美術協会ホームページ)
(9) 『呉新聞』一九四〇年一一月一日第二面
(10) 出原均編「年譜」(図録『広島の美術の系譜—戦前の作品を中心に』広島市現代美術館一九九一年)。戦前の独立展に出品した呉市出身画家には宇根元警のほかに、三好光志、岡部繁夫、常安静人(生まれは現庄原市)がいるが、紙幅の都合により省略する。
(11) 『呉市史』第五巻 四四二頁
(12) 『呉新聞』一九四〇年三月一二日第二面
(13) 『中国新聞』一九四三年五月一五日第四面【呉版】
(14) 大谷省吾「地平線の夢 序論」(図録『地平線の夢 昭和一〇年代の幻想絵画』東京国立近代美術館二〇〇三年)
(15) 前掲 出原均編「年譜」
(16) 『呉新聞』一九四一年三月五日第二面
(17) 『呉新聞』一九三九年六月二五日第一面、『同』一九四〇年一一月一日第二面
(18) 『近代日本アート・カタログ・コレクション 独立美術協会目録編第一〜三巻』東京文化財研究所編纂 ゆまに書房二〇〇四年、『呉新聞』一九三九年六月二三日第一面、『福屋五十年史』福屋社史編集委員会編一九八〇年四七頁
(19) 出原均「戦前における広島美術概観—洋画を中心に—」(前掲『広島の美術の系譜—戦前の作品を中心に』)
(20) 吉田務のご遺族からの聞き取りでは、務は晩年に「寝込むようになった時にも、時々起きあがって絵を描いていたが、人物の目が普通と全然違う位置に描かれ、務の母はその絵を見て務は頭がおかしくなってしまった」と思い心配したそうだ。このエピソードからシュルレアリズムあるいは抽象表現による絵画も制作していたことが推測される。
(21) 「独立美術協会年表」「地方・支部活動記録」(『独立美術協会八〇周年史』独立美術協会編二〇一二年九月一五日)
(22) 『芸備日日新聞』夕刊一九三四年五月七・八・九・一〇・一二日の各日第三面、『中国新聞』一九三四年五月三日第七面
(23) 『呉新聞』一九三四年四月二一日第三面、「青木実(ポペニエ会)について 中野翠氏談」(呉市史編さん資料)
(24) 『実現』第二〇九号(昭和一九三九年一一月号)見開頁、『同』第二一〇号(一九三九年一二月号)一八頁
(25) 「互歩会関係」林義勇氏所蔵(呉市史編さん資料)
(26) 『呉市史』第五巻 呉市役所一九八七年 二七二頁
(27) 呉市において確認できる最後の展覧会は一九四四年一一月二五日から二六日に呉新聞社で開催された「呉海洋美術協会秋季展」であった。(『中国新聞』一九四四年一一月二六日第二面)
(28) 要塞地帯取締法は誤りで、正しくは要塞地帯法。また、呉鎮守府開庁は一八八九(明治二二)年七月一日であり誤記であるが、引用文につき原文のまま所載した。

※ 呉独立研究会会員及び宇根元警の生没年、経歴についてはつぎの文献を参照した。この他に、鎌田知治、鎌田功治は『呉新聞』一九三六年四月二五日第三面、吉田宗一は『呉新聞』一九三九年六月二三日第一面、荒井不可志は藤崎綾学芸員（広島県立美術館）によるご教示、吉田務は聞き取りに拠っている。

（1）「第1部《沿線美術の一〇〇年》出品作家の略歴」（図録『呉線沿線の美術』二〇〇七年　呉市立美術館）

（2）「略歴」（図録『一九四〇―六〇年代　広島洋画の粋』二〇〇四年　広島県立美術館）

（3）前掲出原均編「年譜」

（4）『昭和期美術展覧会出品目録．戦前編』東京文化財研究所美術部編中央公論美術出版二〇〇六年

図版出典

図7・8・11は前掲『広島の美術の系譜』、図4・5・10は前掲『一九四〇一六〇年代　広島洋画の粋』、図2は前掲『呉線沿線の美術』、図13は『'92美術ひろしま』広島文化振興財団、図18は『独立美術十周年記念画集』東京朝日新聞社一九四〇年、図6は『第一〇回独立展集』一九四〇年、図9・14は『第一一回独立展集』一九四一年、図1・3・12・16は『呉新聞』木村務を除く呉独立会員顔写真は『呉新聞』一九四一年三月五日第二面より収録。図15・17と木村務の顔写真は個人提供による。

（むかい・よしなり／呉市役所産業部海事歴史科学館学芸課市史編さん係）